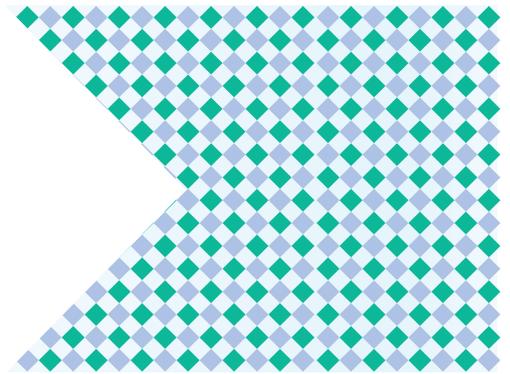


GPN Column

グリーン購入ネットワーク コラム Vol.8



気候変動適応情報プラットフォーム（A-PLAT） 砂川 淳

（国立環境研究所 気候変動適応センター 気候変動適応推進専門員）

1. 気候変動の影響と「適応」について

気候変動の影響は、私たちの暮らしのさまざまなところにすでに現れ始めています。気温上昇による農作物への影響や、過去の観測を上回るような短時間強雨、台風の大規模化等による自然災害、熱中症搬送者数の増加といった健康への影響等。

地球温暖化を止めるには、世界中で石油、石炭、天然ガス等の化石燃料の使用を止めるか、または使用しても温室効果ガスを出さないようにするしかありません。こうした温室効果ガス排出抑制の取り組みを「緩和策」と呼んでいます。2015年12月、パリ協定が採択され、2020年から世界全体が温室効果ガス削減に動き出したことは大きな前進であり、わが国でも、2050年には温室効果ガスの排出を実質ゼロにする方針が掲げられたところです。

しかし、これがうまくいっても、わが国は現状からさらに1℃程度の気温上昇を受け入れねばならない状況にあります。つまり、今後の気温上昇はさらに深刻な影響を与えると予想されており、気候や風土が急激に変わること、これまで当たり前だった環境が維持されなくなります。

そこで、気候変動が起こっても私たちの暮らしが可能な限り持続的なものになるよう工夫することが大切で、そのことを気候変動への「適応」と呼んでいます。気候変動対策には、前述の「緩和策」と「適応策」の両方が必要となります。

今後、気候変動の影響はどのようなものが想定されるでしょうか。

暮らしに身近なところでは、近年の夏の暑さに象徴されるように猛暑日の増加が挙げられます。夏季は常に熱中症のリスクがあり、2020年、環境省では「熱中症警戒アラート」を関東甲信地方の1都8県に試行実施し、2021年には全国で実施することが決まっています。また、すでに桜の開花は早まっており、カエデの紅葉日も遅くなりつつあります。今後の春夏秋冬の有り様や時期が変わることで、自然生態系にも大きな変化が起きてしまうかもしれません。

海水温度も上昇し、現存するサンゴも死滅する頻度が上がり、ノリやワカメの生産においても影響が懸念されます。海水温が上昇すると、海水の体積が増えて海面上昇につながります。南極や山岳にある氷河が融解すると、その分さらに海面が上昇します。そうすると、砂浜が失われ、低地や河口への海水の浸水や高波の被害の増加も考えられます。また、近年特に豪雨が増えて洪水や土砂災害が頻発していますが、今後はその規模が大きくなることや、これまでになかった地域や季節における災害の発生可能性も考えなければなりません。

このように、気候変動の影響は多岐にわたることから、現在、国はこれらの影響と適応を以下の8つの分野に整理し、「適応策」を進めることを検討しています。

(1) 農業・林業・水産業、(2) 水環境・水資源、(3) 自然生態系、(4) 自然災害・沿岸域、(5) 健康、(6) 産業・経済活動、(7) 国民生活・都市生活、(8) 分野間の影響の連鎖

[続きはGPN会員専用ページからご覧いただけます。](#)